

# お詫びと訂正

「日本人が忘れた季節になじむ旧暦の暮らし」22~23ページの図表が一部見えなくなっていました。お詫びして訂正いたします。

七十二候

冬			秋			夏			春			季節												
晩冬	仲冬	初冬	晩秋	仲秋	初秋	晩夏	仲夏	初夏	晩春	仲春	初春													
大寒	小寒	冬至	大雪	小雪	立冬	霜降	寒露	秋分	白露	処暑	立秋	大暑	小暑	夏至	芒種	小満	立夏	穀雨	清明	春分	啓蟄	雨水	立春	二十四節気
初候	初候	初候	初候	初候	初候	初候	初候	初候	初候	初候	初候	初候	初候	初候	初候	初候	初候	初候	初候	初候	初候	初候	初候	七十二候
款冬華 (ふきのとうはなざく)	芹乃菜 (せりさかう)	乃東生 (なつかれくさしよす)	閉塞成冬 (そらさむくふゆとなる)	虹蔵不見 (にじかくれてみえず)	山茶始開 (つばきはじめてひらく)	霜始降 (しもはじめてふる)	鴻雁来 (かみなりこえをおさむ)	雷乃収声 (かみなりこえをおさむ)	草露白 (くさのつゆしろし)	綿柎開 (わたのはなしへひらく)	涼風至 (りようふういたる)	桐始結花 (きはじめてはなをむすぶ)	温風至 (おんふういたる)	乃東枯 (なつかれくさかれる)	蟪蛄生 (かいかおきてくわをく)	蚕起食桑 (かいこおきてくわをく)	蛙始鳴 (かえるはじめてなく)	葭始生 (あしはじめてしよす)	玄鳥至 (つばめきたる)	雀始巢 (すずめはじめてすく)	蟄虫啓戸 (すごりのむしとをひらく)	土脈潤起 (どみやくうるおいおこる)	東風解凍 (とうふうこおりをとく)	黄鶯睨眩 (おういすなく)
次候	次候	次候	次候	次候	次候	次候	次候	次候	次候	次候	次候	次候	次候	次候	次候	次候	次候	次候	次候	次候	次候	次候	次候	七十二候
水沢腹堅 (みずさわあつくかたし)	水泉動 (すいせんどう)	麋角解 (しかのつのおつる)	熊蟄穴 (くまあなにこもる)	朔風払葉 (さくふうはをはらう)	地始凍 (ちはじめてこおる)	雲時施 (しぐれときどきほこす)	菊花開 (きくかひらく)	蟄虫坏戸 (すごりのむしとをこぎす)	鶉鳴鳴 (せせりいなく)	天地始肃 (てんちはじめてさむし)	寒蟬鳴 (ひぐらしなく)	土潤溽暑 (つちうるおいむしあつし)	蓮始開 (はすはじめてひらく)	菖蒲華 (あやめはなざく)	腐草為螢 (ふそうほたるとなる)	紅花采 (へにはなざかう)	蚯蚓出 (みみずいする)	霜止出苗 (しもやんでなえいす)	鴻雁北 (かみきたへかえる)	桜始開 (さくらはじめてひらく)	桃始笑 (ももはじめてわらう)	霞始韃 (かすみはじめてたなびく)	霰始霽 (あられはじめてとけく)	魚上水 (うおこおりにあがる)
末候	末候	末候	末候	末候	末候	末候	末候	末候	末候	末候	末候	末候	末候	末候	末候	末候	末候	末候	末候	末候	末候	末候	末候	七十二候
鷄始乳 (にわとりはじめていゆうす)	雉始雊 (きじはじめてなく)	雪下出麦 (せつがむきをいだす)	鱒魚群 (さけむらがる)	橘始黄 (たちばなはじめてきなり)	金盞香 (きんせんこうばし)	楓薦黄 (もみじつたきなり)	蟋蟀在戸 (きりぎりすとにあり)	水始涸 (みずはじめてかれる)	玄鳥去 (つばめさる)	禾乃登 (こくものみのる)	蒙霧升降 (のつむしよすこす)	大雨時行 (たいうときどきふる)	鷹乃學習 (たかわざをならう)	半夏至 (はんげしよす)	梅子黄 (うめのみきなり)	麦秋至 (はくしゅういたる)	竹笋生 (たけのこしよす)	牡丹華 (ぼたんはなざく)	虹始見 (にじはじめてあらわる)	雷乃发声 (かみなりこえをはこす)	菜虫化蝶 (なむしちようとかす)	草木萌動 (そうもくもえうご)	草木萌動 (そうもくもえうご)	魚上水 (うおこおりにあがる)

『日本の七十二候を楽しむ』(白井明大・有賀一広、東邦出版)などをもとに、編集部作成